ひかわ玲子
女戦士エフェラ&ジリオラシリーズ
双頭竜の伝説

女戦士エフェラ&ジリオラシリーズ
双頭竜の伝説

著　者　ひかわ玲子
発行者　塚田友宏
発行所　株式会社　大陸書房
〒113東京都文京区本郷2-3-9
電話03-814-7441(販売)
03-814-5693(編集)
振替口座　東京1-56612番

印刷・製本　中央精版印刷(株)

乱丁・落丁のものは小社またはお買求めの書店にてお取替え致します。
定価はカバーに表示してあります。
© REIKO HIKAWA 1990 Printed in Japan
ISBN4-8033-2690-8

エラ&ジリオラシリーズ

頭竜の伝説

ひかわ玲子

日本財団支援

笹川良一記念文庫

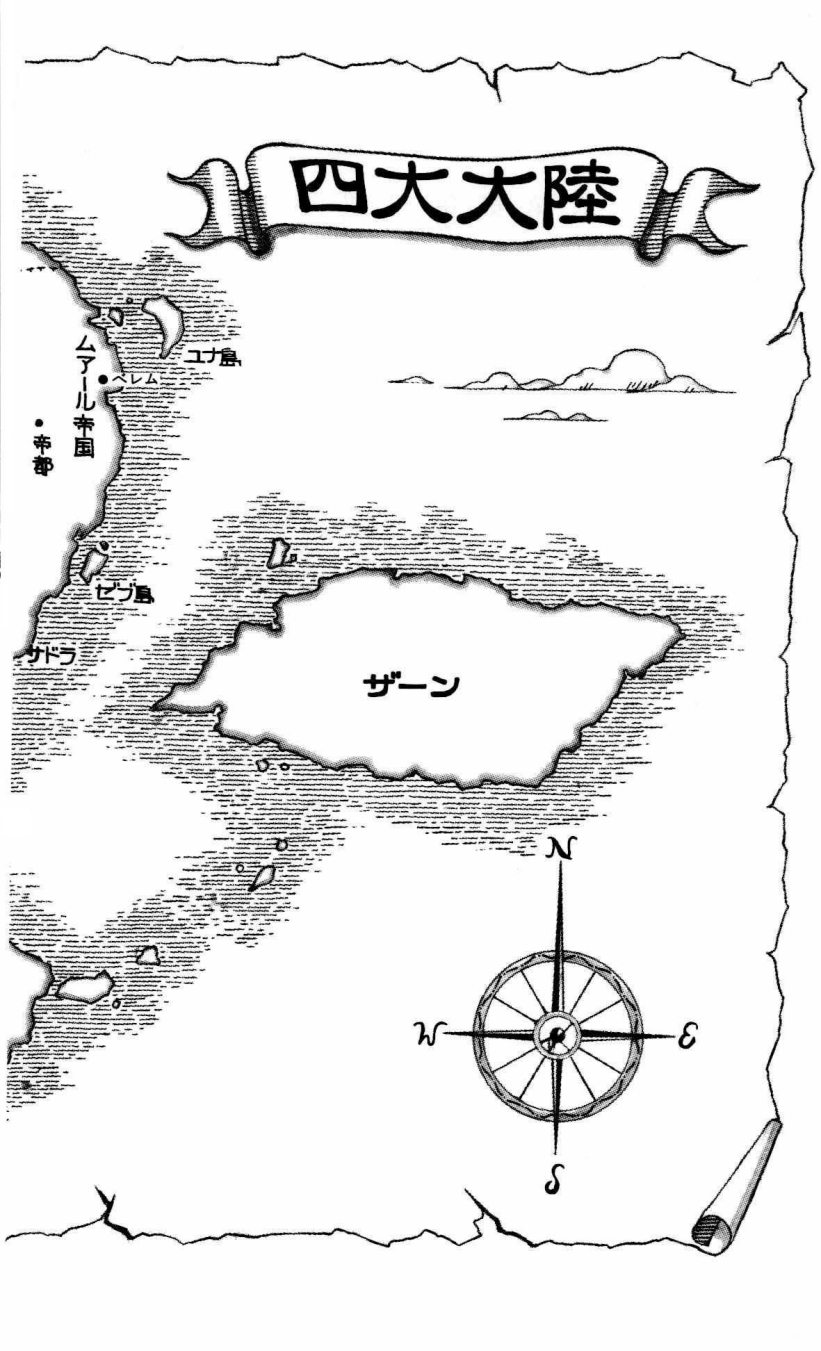
財団法人日本科学協会

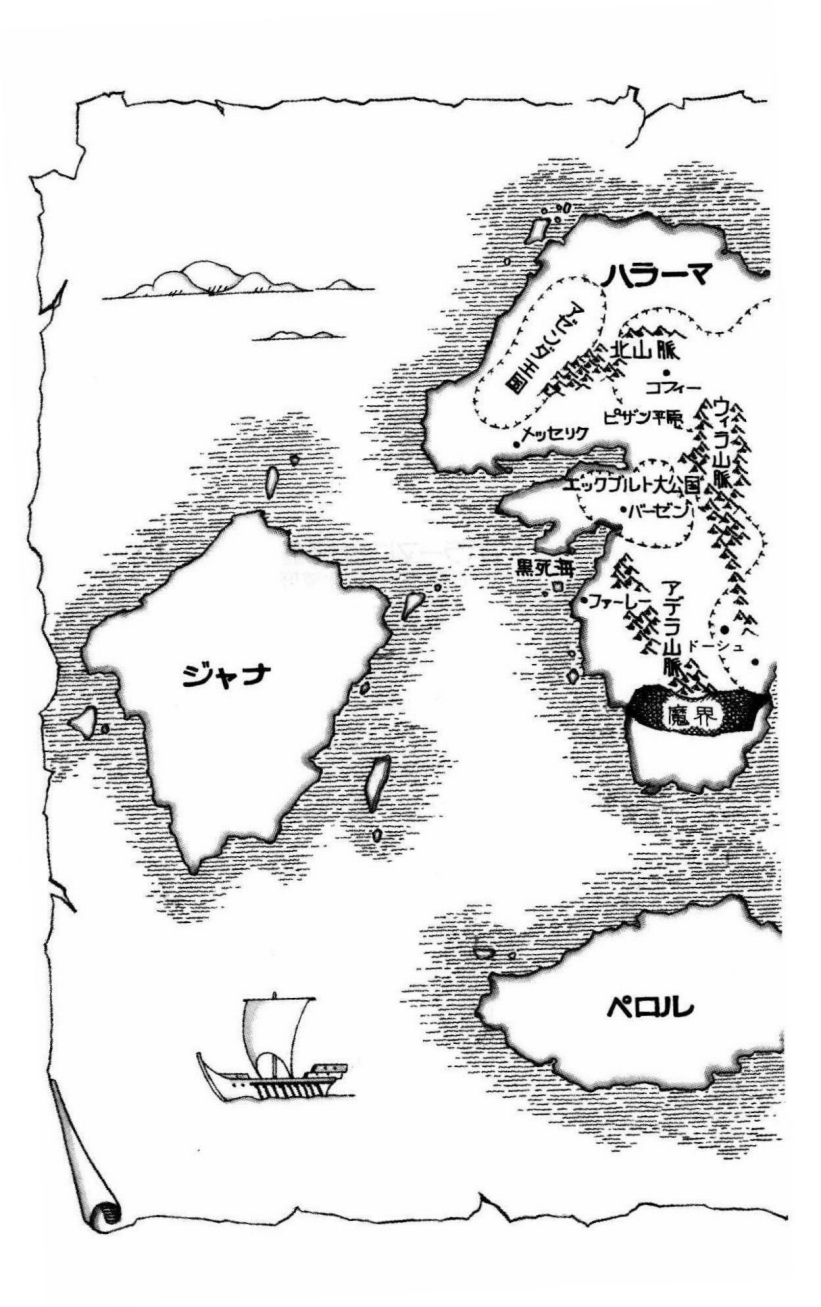
地図イラストレーション／姫野晶夫
本文イラストレーション／米田仁士

目次

プロローグ　7
第一章　アデラ山脈の朝焼け　17
第二章　魔道士たちの密約　53
第三章　ドーシュの会見　84
第四章　運命の輪　121
第五章　青きラール　150
第六章　心のままに　181
第七章　滅びの笛　208
第八章　神々の目覚め　225
第九章　風に生まれる　236
エピローグ――水のように、風のように　255
あとがき　261

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb


四大大陸
ユナ島
ベレム
ムアール帝国
帝都
ゼブ島
サドラ
ザーン
N
W
E
S


ハラーマ
四王国
北山脈
コフィー
ピザン平原
メッセリク
ウィコ山脈
エックブルト大公国
バーゼン
黒死海
ファーレー
アデラ山脈
ドーシュ
魔界
ジャナ
ペロル

［ハラーマにおける暦］
16か月にて1年（太陰暦）

1月　火の陰月
2月　オリガの土の月
3月　水の陰月
4月　ゼルクの水の月
5月　風の陰月
6月　ゼルクの風の月
7月　土の陰月
8月　オリガの二の土の月
9月　オリガの風の月
10月　ゼルクの土の月
11月　火の二の陰月
12月　オリガの火の月
13月　ゼルクの二の風の月
14月　オリガの水の月
15月　水の二の陰月
16月　ゼルクの火の月

プロローグ

神々は眠っている。
瞼を閉じて、ほとんど永劫にも近い年月をその封じられた双眸の奥に隠し……眠り続けている。
時は動かない……ここでは。
そこに、静かな空間がある。
無限の時、という空間……いや。
（時は無限ではない。神々にとっては無限であっても、この空間に関わる人には無情に時は流れていく……）
この世界のどこまでが神の領域で、どこまでが人の領域なのだろう？
生命は？　人の運命は？
人が生き、人が出会い、人が死ぬことのどこまでが人の領域なのだろう……？
聖堂を司どる祭司長の純白の長い髪がさらり、と音を立てた。
だが、その音は神々の聖堂の圧倒的な静寂に呑み込まれてしまう。

ほっ……と若い容姿を保ちながら、人の世にはあらざる長い時を経てきたザーンの女魔道士は溜め息をついた。
白い肌、白い髪、白い瞳。
彼女は神秘の紫の大陸に生きるザーン人特有の外見を備えている。
神々の通路を満たす不思議な光が彼女を取り巻き、黄金の髪飾りを煌めかせている。
視界の果てまで続く長い長いこの広く白い柱廊は、どこまでも先が続くばかりで、どこにも通じていない。いや、だからこそ、あらゆる場所へと通じているという……。神々にとって、世界の有り様とはまさにこの果てのない、果てしのない通路なのかもしれない。いつかどこかで……この通路はひとつの円環を成しているのかもしれない。どうであろうと、神々にとってはきっとどうでもいいことなのだろう。
シニラ祭司長は、柱廊の両脇からこの通路を覗き込む、巨大な神々の頭像を見上げる。
目を固く閉じた神々……ゼルクの四柱の神々と呼ばれている、人の頭部の虚像。
そして、その神々を見下ろすように凍結している、双頭の竜の巨体。
光る紅い瞳、翠の鱗の生えた太い胴体をくねらせ……怒れる竜は凍った時の中でもがいている。
いつか目覚めて、神々の創造したこの世界を破壊しようとでもしているかのように。
「……どうしたね、えらく弱気じゃあないかね、シニラ?」
いきなり。

揶揄するような声が降ってきたのに、美しい神々の聖堂の司は心底不快げな表情を露わにした。

「はっは！

そんな顔をしたってダメさ、シニラ。

あたしゃ、あんたより長い時を生きているんだ。

お前さんがいかに偉そうにして、ザーンの魔道士どもを顎で使ってたところで、あんたが神々の代弁者になれるわけじゃないさ！」

「――ダルーフォン」

シニラは、落ち着いた静かな口調でささやくように言った。

「あなたごとき古魔術の妖術使いに口出しをされる理由はございませんわ。

お引き取り下さいな。あなたが古巣にしている妖精界とやらに」

「ご挨拶だね！」

白い神々の通路の上に、薄汚れた襤褸を身に纏った老婆が現れた。その周囲を、怯えたような顔をした小さな妖精たちが飛びかっている。

「……ふん。

オカレスク小僧の血を引く小娘のせいで、ハラーマじゃとうとうムアールの夢石の場が崩れちまったみたいじゃないか。ま……こっちはせいせいしたけどね。お前さんたちはさぞかし慌ててるだろうと思って来たけれど。……それほどでもないみたいだね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

――というか。
身内の騒動の収拾に大童で、それどころじゃない……か？
どうだい、図星だろう？」
「ダルーフォン……いい気にならないで下さいね」
シニラはあくまでも口調を変えず、冷たく言い放った。
「ザーンの百人委員会があなたの存在を黙認しているのは、ハラーマにおけるあなたの存在をハラーマ・ギルドの問題として干渉すまい、という配慮からでした。
従って、今となってはあなたの立場はとても微妙なのですよ……？」
「ふん？　脅しかい？
そんな偉そうな言い種は、ハラーマにいるお前さんとこのひよっこ魔道士どもをきちっと始末つけてから言うんだね。迷惑するよ、ああいうのにうろつきまわれるとね。
あいつらに比べりゃ、ハラーマ・ギルドの魔道士どもはずっと躾もいいし、おとなしいさ――」
古魔術士の老婆のこの言葉は、ザーンの魔術の司のひとりであるシニラ祭司長の、痛いところを突いたようである。漂白されたように白い面の白い口元を、彼女はひととき、閉じた。
「おっと……噂をすれば、おいでなすったようだよ、あんたの客人がさ。
迎えなくていいのかい？」
老婆が言う通り、空間が開き、何者かがこの神々の通路に侵入しようとしている。

青いマントを着た白髯の老人を取り巻く、白きザーンの魔道士たち……。
「あなたは招かざる客ですわ、ダルーフォン」
あくまでも穏やかに、シニラ祭司長は告げた。
「お前さんがそう言っても、あっちの方なら別なことを言うかもしれないよ」
ダルーフォンは面白そうに言う。
シニラの両腕がすっと前に出され、その指先から紫色の光がほとばしった。
ダルーフォンは光を避け、素早く空中へと逃れた。妖精たちとともに、老婆の体はふわりと浮かぶ。
老婆は乾いた笑い声を立てた。
「わかったよっ！
それじゃあ、おいぼれは隠居場へ戻ろうかね。でも……用心おしよ。
神々の力を徒らにもてあそんで、取り返しのつかないことをおしでないよっ！　そんなことをされた日には、あたしだってえらい迷惑なんだからね！
あんたは所詮、人さ。
あの、オカレスクの小娘もよくわかっていて、あんたは噛みついてたじゃないか。あんたが何を知っているんだってね！
双頭の竜を起こした日には、あんただってどうすることが出来るんだい？」
「あなた以上に、そのことはわかっているつもりですわ、ダルーフォン……」

シニラの口から、吟うように古き言葉が漏れた。
その言葉の意味は簡単だが、強制力がある……。
『――去ね！』
ダルーフォンの姿は、笑いながら消えた。
「今のは……妖精界に住む古魔術師の媼ではありませぬかな」
やがてやってきたハラーマの魔術士ギルドの長老の言葉に応じて、シニラ祭司長は答えた。
「その通りです。
古き神の力を私にして、不死をむさぼっている者……もっとも、ああなっては人とは申せませんし、あまりに長く……そう、この神々の聖堂に住む魔術の司たちが知る一番古い記憶よりも長く生きていると称しているから、ああして目こぼしを受けているのですわ。
でも、いくら長く生きても、人の叡智とはまた別のところにあるようです」
「……そうでしょうか？
わたしなどには、長い時はどんな者にも叡智を授けるように思われますが。そのように長い時をみつめてきた者なら、侮れない何かの知恵があるのでは、と若輩の者は期待するものです。
しかし……確かに。
わたしめにギルドの若い魔道士たちに教えられる本当の何かがあるのか、と問い返してみると、あなたのお言葉ももっともかと思われる節はありますな、ザーンの魔術の司殿」
シニラ祭司長は、ゆっくりと老魔道士の方をふり返った。

その白い長い髪を飾る黄金色の髪飾りがチリ……と鳴った。
青いマントを身につけたハラーマの老魔道士――グルク老は丁重に頭を下げた。
「こうしてザーンの神々の聖堂に招かれたこと、この上もなく光栄に存じます。ハラーマの魔道士ギルドは代表して参りこしました。
グルクです」
「……存じておりますわ」
シニラ祭司長は微笑んだ。
「シニラです。この神々の聖堂の守り人をしております。
ザーンへようこそ、ハラーマの魔道士殿。
新しい盟約が必要になっておりますわ。ザーンと、ハラーマの間には」
「はい……まさに」
グルク老はうなずいた。
「その通りですな。今も……百人委員会の議場では、そのことが話し合われておりましてな」
グルク老の背後には百人委員会のザーンの魔道士たちがいる。彼らがここまでグルク老を導いてきたのだ。
シニラ祭司長はしとやかに顔を上げ、そしておもむろにハラーマのギルドの長老を見ると、口を開いた。
「今度のハラーマでの経緯について。

わたしたちは互いに事態をよくわかっていることと存じますわ、グルク殿。
提案があるのです。ザーンからハラーマへの要望として」
「……と、申されますと？」
グルク老はとっさに眉をひそめ、問い返した。
シニラ祭司長の白い顔がにこり、と微笑んだ。
「例の……青き娘のことです」

いつのことかもわからないほどの昔。
古き神々とゼルクの神々は互いに争う時代があったという。神々は戦いの果てにひとつの合意に達し、そしてこの世界は築かれたという。
神々の戦いに巻き込まれて地上へと落とされた人間は、神々が戦いの末に去ったこの世界にやがて人の世を作った。だが、今なおこの大地には神々の戦いの痕が残されている。
ハラーマ、ペロル、ザーン、ジャナ……人が棲む四つの大陸のどれもに、そうした神々の戦いが残した歪み、足跡が残されている。ハラーマの魔界、大陸ジャナの地下迷路、紫の地ザーンの神々の聖堂。
そうした場には、人々の介入を拒む神々の場……魔の領域がある。
そうした神々の力、魔力を操る才能を持つ者もいる。魔道士たちである。
さまよえるソレンジュを力の源とするゼルクの魔術、あるいはこの世界に残されて遍在する

古き神々の力を利用する古魔術を使う魔道士たち。彼らは魔術の才を持つ者をあらかじめ自分たちで引き取り、魔道士たちのギルド組織へと組み入れて、そこで魔術の研鑽と世界の在り方について教育を授けた。その強大な力が人の世の均衡を崩すことが無いように。それは、この世界の在り方を秩序へと向かわせるためには必要なことであった。

だが、今……時は移ろい行こうとしていた。

人が棲む四つの大陸で、最大の大陸であるハラーマ。

ハラーマにはムアール帝国があった。

ムアール帝国は大陸を一代で制覇し、ハラーマに統一と秩序を達成した英雄オカレスク大帝によって築かれた。

オカレスク大帝は大陸ザーンより神々の力が宿る夢石を持ち帰った。その神々の力を使ってムアール帝国という場を確実に未来へと維持するために。夢石はムアール帝国の帝王の玉座として据えられ、そのため、オカレスク皇朝は長大な歴史を誇ることになった。

実に八十代にも及ぶその支配の時を経て、ようやくに帝国も衰退の時を迎えた。ハラーマは戦乱の時代となった。夢石の座はオカレスク大帝の大陸統一の意思を守り、かろうじてそこにハラーマ支配の力を保たせ続けてはいたが。そして、八十八代目の帝王としてジリオラ女帝が即位するに至って、ようやく夢石はその役目を終えたのである。

ハラーマにはその時、すでにいくつかの帝国への対抗勢力が育ちつつあった。

かねてより帝国から離反し、破竹の勢いでハラーマの中央平原を制覇し、今も勢力を伸ばし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb